宮崎大学教育文化学部紀要　芸術・保健体育・家政・技術　第22号（2010）11－18頁

被服行動における色彩意識の変化

岡村　好美

Changes of Color Consciousness in Clothing Behavior

Yoshimi OKAMURA

1. 緒言

現代人に被服は必要不可欠なモノであるが，不況下では被服の買い控えが特に大きいと言われている。しかし，近年の不況下においても業績を伸ばしている企業があり，これは製品が低価格であることだけでは説明できない状況であり，被服行動の解明には生活者意識のにおける基礎的要因を明らかにすることが必要であると思われる。被服における消費行動については多数報告されており，影響要因として柏尾等[1)]は流行性・機能性・品質・TPOの４因子をあげている。これまでに筆者は，被服をはじめとした生活用品の消費行動は，個人で確認しやすい要因の影響を受けやすいことを報告しており[2)]，柏尾等が示した４因子では，流行・TPOが機能性・品質に勝る影響因子であると考えられた。流行は色彩要素・形態的要素・素材要素からなり，素材要素は機能性や品質との関係が強いことから，他者との関わりが無視できない被服においては，視覚判断への影響が大きい形態や表意意味を有する色彩の影響が大きいと考えられる。橋本等[3)]は，色彩の嗜好はファッション意識と類似するとし，三浦等[4)]の，色彩嗜好が具体的形態を伴った場合に変化するという報告は，流行要因として色彩と形態は無視できないモノであることを示していると考えられる。また近年の工業製品やファッションの色返り（バック・トゥ・カラー）現象の要因が社会的背景であるという報告は[5)]，被服をはじめとしたモノの色彩が購買行動の重要要因であることを示していると考えられる。色彩嗜好に社会的・時代的背景が影響することは橋本等[3)]も報告しており，変化する社会状況下での被服行動には色彩が密接に関係していることは明らかである。

本研究では，人として生活していく上で不可欠な，そして，もっとも身近な状態で使用する被服について，選択や着装における色彩意識の変化要因を明らかにすることを目的として，被服行動における意識調査と嗜好色・嫌悪色調査を行い，また，流行色との比較を行うことによって，被服色における基本的な意識の解析を試みた。

2. 方法

大学生405名（2004年度生242名，2008年度生163名）を対象とした留置法による質問紙調査を行った。調査時期は2004年，2008年とも10月から12月である。

質問は，被服の選択意識23項目について「はい」から「いいえ」を５段階で評価を求め，「はい」を５点，「いいえ」を１点として項目ごとに得点化し，性別・年度別に平均値の差の検定および因子分析を行った。また，色相×トーンの一覧表（PCCS）を用いた色彩嗜好調査から，色嗜好と流行との関係を明らかにし，流行色との関係から被服行動における色彩に関する影響因子を検討した。

3. 結果および考察

3.1　被服行動における性の影響

学生の被服行動意識を表１に示す。被服行動における男女差は，04年度生より08年度生において多い項目で認められた。両年度に共通して認められた項目は，「No.13　小物は柄の好き嫌いで選ぶ」，「No.14　流行が気になる」，「No.15　うきうきした気分になるのは好きな色の服を着たときだ」，「No.16　柄は同系色で選ぶ」，「No.17　自分が好きな色と似合う色は同じである」で，項目No.17以外は両年度において女子学生の高い意識が示された。これらの項目

表１　男女比較

カテゴリー ＼ 対象	04 年度				08 年度			
	女子学生	男子学生	t 値	有意水準	女子学生	男子学生	t 値	有意水準
1. 小物は直感で買う	3.70	3.72	-0.128		3.80	3.57	-1.226	
2. 嫌いな色の服を着ると、落ちつかない	3.65	3.39	1.497		3.87	3.24	-3.114	**
3. 柄はデザインの内だと思う	4.62	4.45	1.783		4.83	4.65	-2.087	*
4. 衝動買いするのは小物より服が多い	3.10	2.90	1.053		3.17	2.84	-1.608	
5. 小物は色の好き嫌いで選ぶ	3.35	3.17	1.073		3.37	3.49	0.666	
6. 柄物は補色系で選ぶ (補色：簡単に言うと反対の色、はっきりした明快な配色（例）赤－緑、黄色－青)	2.41	2.81	-2.727	**	2.25	2.38	0.849	
7. 似合う色の物が自分の側にあると、うきうきする	3.52	3.63	-0.619		4.08	3.35	-3.836	***
8. 自分の服は色を重視して選ぶ	3.72	3.73	-0.044		3.99	3.89	-0.686	
9. 服は直感で買う	3.42	3.50	-0.499		3.12	3.32	1.114	
10. マフラー等の小物は好きな色を重視して選ぶ	3.87	3.50	2.410	*	3.41	3.65	1.078	
11. 似合う色の服を着ると、うきうきした気分になる	3.94	3.75	1.325		4.46	3.70	-5.450	****
12. 衝動買いをよくする	2.98	2.95	0.216		3.06	2.73	-1.493	
13. 小物は柄の好き嫌いで選ぶ	3.78	3.43	2.569	*	3.90	3.35	-2.996	**
14. 流行が気になる	3.21	2.90	2.038	*	3.91	2.51	-7.739	****
15. うきうきした気分になるのは好きな色の服を着た時だ	3.38	2.97	2.766	**	3.40	2.92	-2.687	**
16. 柄物は同色系で選ぶ	3.37	3.05	2.450	*	3.28	2.84	-2.688	**
17. 自分が好きな色と似合う色は同じである	3.06	3.59	-3.422	***	2.83	3.19	2.092	*
18. 色もデザインの内だと思う	4.08	3.92	1.124		4.65	4.54	-1.125	
19. バックやポーチ等の小物は自分に似合う色で選ぶ	3.80	3.27	3.520	***	3.22	3.43	1.049	
20. 好きな色の物が側にあると、うきうきする	3.31	3.45	-0.987		4.12	3.22	-5.170	****
21. マフラー等の小物は似合う色を重視して選ぶ	3.68	3.38	2.053	*	3.73	3.73	-0.004	
22. 自分の服は柄を重視して選ぶ	3.39	3.64	-1.806		3.43	3.38	-0.290	
23. 似合う色の服を着ると、落ちつく	3.55	3.79	-1.815		4.09	3.70	-3.030	**

以外でも男女差が認められ，女子学生で高い意識を示した項目は色彩の内容であることから，色彩が流行に対する女子学生の判断要因であると思われる。そしてこのことから，女子学生は流行を取り入れる要素を自ら設定していると推察できる。柄と色へのデザイン意識は男女学生ともに柄に対して強く感じているようだが（項目No.3, 18），自分の服は柄より色を重視して選択していることが示された（項目No.8，22)。また，学生は比較的強く身近に似合う色を置きたいと思う傾向（項目No.7，11，21，23）が認められるが，殆どの項目において男子学生の評価が低いことから，色の判別意識は男子学生より女子学生の方が強いと考えられた。そしてこれは，男女学生において明瞭に向上している好きな色と似合う色の判別意識（項目No.17）からも推測できる。項目No.10とNo.19より女子学生は小物の種類によっても色を判別していると考えられ，これは着装状態の面積比は被服で大きく，小物において小さい場合が多いことに基づいていると考えられることからも推察できる。衝動買いは，男女ともに大学生はあまりしない傾向が認められ（項目No.12），また，衝動買いをする場合の対象は服より小物を考えている傾向が認められ（項目No.1，No.9），大学生は男女ともに慎重に被服行動を行っていると考えられた。

3.2　被服行動における年度の影響

2004年度と2008年度の学生の比較を表２に示す。有位な年度差は男子学生より女子学生で多く認められ，女子学生で有位な差が認められた項目（項目No.3，7，8，10，11，14，18，19，

表２　年度比較

カテゴリー ＼ 対象	女子学生				男子学生			
	04年度	08年度	t 値	有意水準	04年度	08年度	t 値	有意水準
1. 小物は直感で買う	3.70	3.80	0.612		3.72	3.57	-0.802	
2. 嫌いな色の服を着ると、落ちつかない	3.65	3.87	1.258		3.39	3.24	-0.720	
3. 柄はデザインの内だと思う	4.62	4.83	3.012	**	4.45	4.65	1.800	
4. 衝動買いするのは小物より服が多い	3.10	3.17	0.347		2.90	2.84	-0.328	
5. 小物は色の好き嫌いで選ぶ	3.35	3.37	0.149		3.17	3.49	1.799	
6. 柄物は補色系で選ぶ（補色：簡単に言うと反対の色、はっきりした明快な配色（例）赤－緑、黄色－青）	2.41	2.25	-1.199		2.81	2.38	-2.620	**
7. 似合う色の物が自分の側にあると、うきうきする	3.52	4.08	3.563	***	3.63	3.35	-1.421	
8. 自分の服は色を重視して選ぶ	3.72	3.99	2.150	*	3.73	3.89	1.051	
9. 服は直感で買う	3.42	3.12	-1.957		3.50	3.32	-0.921	
10. マフラー等の小物は好きな色を重視して選ぶ	3.87	3.41	-2.495	*	3.50	3.65	0.921	
11. 似合う色の服を着ると、うきうきした気分になる	3.94	4.46	4.471	****	3.75	3.70	-0.280	
12. 衝動買いをよくする	2.98	3.06	0.425		2.95	2.73	-0.998	
13. 小物は柄の好き嫌いで選ぶ	3.78	3.90	0.890		3.43	3.35	-0.457	
14. 流行が気になる	3.21	3.91	4.847	****	2.90	2.51	-2.097	*
15. うきうきした気分になるのは好きな色の服を着た時だ	3.38	3.40	0.186		2.97	2.92	-0.299	
16. 柄物は同色系で選ぶ	3.37	3.28	-0.659		3.05	2.84	-1.338	
17. 自分が好きな色と似合う色は同じである	3.06	2.83	-1.525		3.59	3.19	-2.320	*
18. 色もデザインの内だと思う	4.08	4.65	5.134	****	3.92	4.54	4.773	****
19. バックやポーチ等の小物は自分に似合う色で選ぶ	3.80	3.22	-3.484	***	3.27	3.43	0.875	
20. 好きな色の物が側にあると、うきうきする	3.31	4.12	5.520	****	3.45	3.22	-1.351	
21. マフラー等の小物は似合う色を重視して選ぶ	3.68	3.73	0.378		3.38	3.73	2.194	*
22. 自分の服は柄を重視して選ぶ	3.39	3.43	0.294		3.64	3.38	-1.563	
23. 似合う色の服を着ると、落ちつく	3.55	4.09	4.433	****	3.79	3.70	-0.642	

20，23）は色に関する内容が多かったことと，そのほとんどで08年度の学生が04年度の学生より高い意識を示し，似合う色の服（項目N0.11，23）に対して高い意識を示したことから，08年度の女子学生は被服行動における色彩意識が強くなったと感じられた。一方，男子学生の有位な年度差は色彩に関することに加えて小物において認められた（項目No.21)。男女ともに有位な年度差は「No.14　流行が気になる」,「No.18　色もデザインのうちだと思う」で認められ，女子学生だけでなく男子学生においても08年度の学生は色彩への関心が高くなっていることが示された。また男子学生は，女子学生とは逆に04年度でも低かった流行への意識がさらに低下したことから，好きな色と似合う色の判別意識の向上は（項目No.17)，顔に接する状況で使用する服飾品において発揮され（項目No.21)，その色彩は流行に左右されない判別意識に基づくと推察された。

3.3　大学生の購買行動意識

04年度，08年度大学生の購買行動の因子分析結果を表３に示す。因子数は相関行列が１より大きい固有値の数とした。08年度の男子学生の意識は他の学生より集中しており，特に色彩への意識の集中が認められた。これは，04年度の男子学生では好きな色・似合う色の判断において曖昧さが認められることに対して，08年度の男子学生では明瞭になっていることからも明らかである。また，色彩への関心の高まりとともに，選択する品目や購入に対する計画性の意識

表３　大学生の購買行動意識

カテゴリー ＼ 対象	04 年度						08 年度					
	女子学生			男子学生			女子学生			男子学生		
	色彩	計画性	服飾	嗜好	色彩	感性	色彩	計画性	配色	色彩	感性	計画性
1. 小物は直感で買う		0.5389										
2. 嫌いな色の服を着ると、落ちつかない										0.6767		
3. 柄はデザインの内だと思う						0.6138					0.7556	
4. 衝動買いするのは小物より服が多い								0.5688				
5. 小物は色の好き嫌いで選ぶ			0.6267	0.6302								0.7547
6. 柄物は補色系で選ぶ（補色：簡単に言うと反対の色、はっきりした明快な配色（例）赤－緑、黄色－青）												
7. 似合う色の物が自分の側にあると、うきうきする	0.8761				0.8182		0.8434			0.7472		
8. 自分の服は色を重視して選ぶ	0.5217								0.5348		0.6724	
9. 服は直感で買う		0.7099										
10. マフラー等の小物は好きな色を重視して選ぶ			0.5006	0.6834				0.5264		0.6313		
11. 似合う色の服を着ると、うきうきした気分になる	0.7135				0.6425		0.8121			0.6295		
12. 衝動買いをよくする		0.6077						0.5504				0.5613
13. 小物は柄の好き嫌いで選ぶ												0.5613
14. 流行が気になる												0.5316
15. うきうきした気分になるのは好きな色の服を着た時だ	0.7026									0.8663		
16. 柄物は同色系で選ぶ									0.6404			
17. 自分が好きな色と似合う色は同じである						0.5484				0.5495		
18. 色もデザインの内だと思う											0.5720	
19. バックやポーチ等の小物は自分に似合う色で選ぶ										0.6475		
20. 好きな色の物が側にあると、うきうきする				0.5000			0.8645			0.7821		
21. マフラー等の小物は似合う色を重視して選ぶ	0.5154				0.6111					0.5279		
22. 自分の服は柄を重視して選ぶ	0.5554			0.5898				0.6204			0.5728	
23. 似合う色の服を着ると、落ちつく										0.6075		
寄　与　率（%）	16.47	7.76	6.76	11.25	10.31	7.67	16.01	10.42	6.57	21.28	13.85	9.08
累積寄与率（%）	16.47	24.23	30.99	11.25	21.57	29.24	16.01	26.43	32.99	21.28	35.13	44.21

も向上していると考えられた。一方，女子学生の意識に04年度と08年度で大きな違いは認められないが，被服購入における衝動買願望が推察され，表２において増加した女子学生の衝動買い（項目No.1，4，12）が小物と服の両方においてであることを裏付けていると考えられた。04年度，08年度男女大学生に共通する購買意識は，「No.7　似合う色の物が自分の側にあるとうきうきする」，「No.10　マフラーなどの小物は好きな色を重視して選ぶ」，「No.11　似合う色の服を着るとうきうきした気分になる」が示され，大学生は潜在的に似合う色を求めていると考えられ，この傾向は08年度の男子学生において著しいと考えられた。また，表３に示す各因子名より，学生の被服行動には色彩の影響が反映されることが多いと考えられた。

表３の結果において，大学生４対象中３対象以上の購買因子として示された９項目の分散分析の結果を表４に示す。また，下位検定の多重比較（テューキー法）により有位差が認められた項をマークした。この９項目は大学生の被服行動におけるこだわりの項目と考えられ，顕著な有意差が認められたNo.7，11，20の項目ではすべて08年度の女子学生に高い意識が認められた。また，これらの項目が色彩に関する内容であることより，女子学生の基本的な色彩判断意識は似合うという意識によってもたされるうきうき感である考えられた。また，低いが有位な差が認められた項目からは，顔に隣接する色彩へのこだわりは低いことが示され，この意味において女子学生の色彩判断は十分とは言えない状況であると推測された。そこで，他者からの

表４　被服行動における特徴的意識

カテゴリー ＼ 対象	女子学生		男子学生		F 値	有意水準
	04年度	08年度	04年度	08年度		
5. 小物は色の好き嫌いで選ぶ	3.35	3.37	3.17	3.49	1.12	
7. 似合う色の物が自分の側にあると、うきうきする	3.52	4.08	3.63	3.35	5.64	***
8. 自分の服は色を重視して選ぶ	3.72	3.99	3.73	3.89	1.69	
10. マフラー等の小物は好きな色を重視して選ぶ	3.87	3.41	3.50	3.65	2.89	*
11. 似合う色の服を着ると、うきうきした気分になる	3.94	4.46	3.75	3.70	10.61	****
12. 衝動買いをよくする	2.98	3.06	2.95	2.73	0.89	
20. 好きな色の物が側にあると、うきうきする	3.31	4.12	3.45	3.22	11.98	****
21. マフラー等の小物は似合う色を重視して選ぶ	3.68	3.73	3.38	3.73	2.61	
22. 自分の服は柄を重視して選ぶ	3.39	3.43	3.64	3.38	1.46	

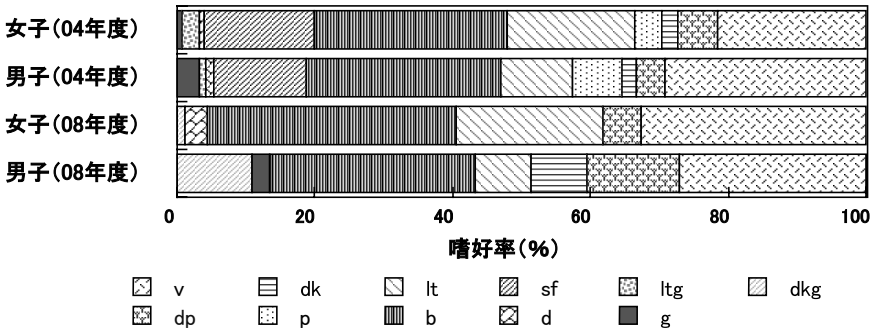

図１　学生のトーン別嗜好傾向

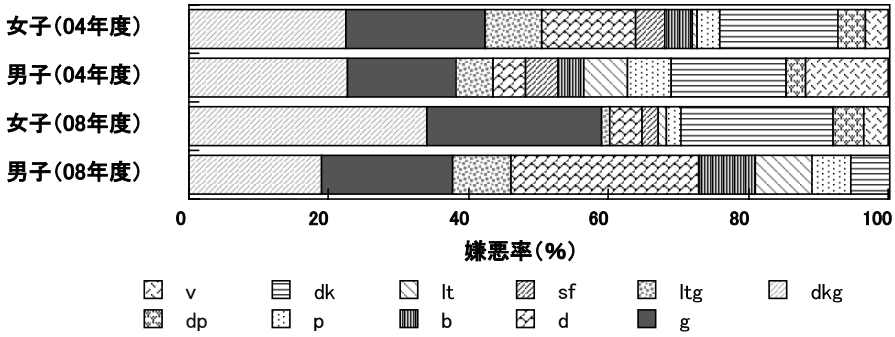

図２　学生のトーン別嫌悪傾向

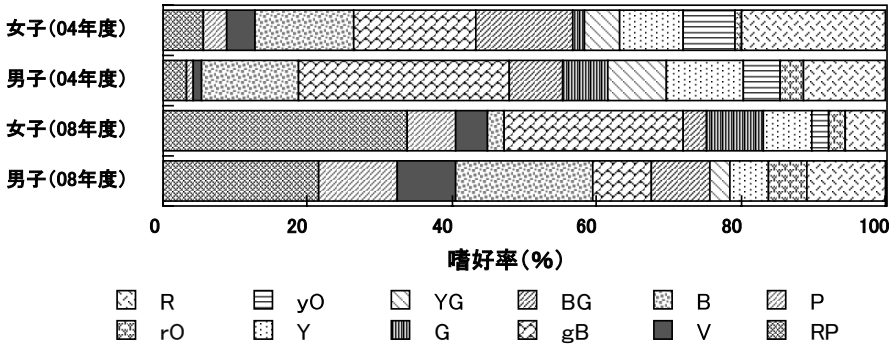

図３　学生の色相別嗜好傾向

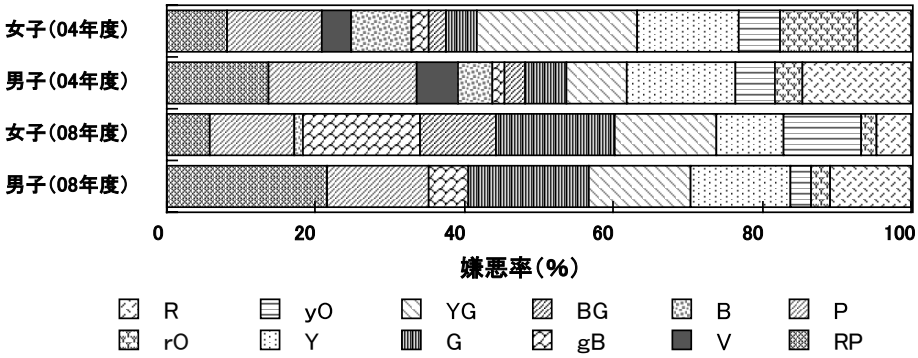

図４　学生の色相別嫌悪傾向

色彩提示であり，女子学生の関心が高い「流行色」と大学生の色彩判断要因の関係について，大学生の嗜好調査結果を用いて検討した。

図１から図４に大学生の嗜好色相・嫌悪色相，嗜好トーン・嫌悪トーンを示す。各年度男女大学生が共通して好む最も好んだ色相はグリーンブルーで，次いでブルー，レッドであった。

04年度と08年度の違いはレッドパープルにおいて顕著に認められ，男女ともに08年度生はレッドパープルを好む傾向を示し，特に女子学生には際立って好まれる色相であった。嫌悪色は嗜好色より分散されるが，比較的共通した嫌悪色はイエローグリーン，パープル，イエローであった。嫌悪色の分散は08年度で強いが，08年度の男子学生はレッドパープルを嫌う傾向が強く，女子学生はブルーからグリーンの色相を広く嫌う傾向を示した。トーンは色相より嗜好・嫌悪の傾向が明瞭で，嗜好トーンは各年度男女学生ともにビビッド，ブライト，嫌悪トーンはダークグレイッシュ，グレイッシュ，ダークであった。また，女子学生は04年度，08年度ともにライトトーンも好むことが示された。一般に日本人はブルーやレッドを好むことやビビッドトーンやライトトーンに好みが集まり，イエローやパープルを嫌う傾向であることが報告されており[6)]，この点において本調査対象学生の色彩嗜好は標準的であると考えられる。しかし，一般にはグリーンも好まれるのに対して本調査では異なる傾向が認められ，この意識の変化が年度差として示されたことは，かれらの色彩意識に影響を及ぼす要因が存在することを示唆すると考えられる。

色彩が関与する要因として「流行」が考えられ，表２において大学生に色彩意識に有位な年度差が認められたことから，大学生の色彩意識と流行の関係について検討を進めた。年２回示される流行色は１色ではなく複数色示されるが，通常取り上げられる流行色は，この中で注目された色彩である。本調査を実施した時期の特徴的な流行色は2002年度：ブルー系，2003年度：グリーン，ブルー系，2004年度：ピンク，2005年度：ワイン，パープル，ブルー，グリーン，2006年度：ワイン，グレイッシュレッド，2007年度：ブラウン系，2008年度：イエロー，イエローグリーンであった[7)]。これを本調査結果に当てはめると，レッドのライトトーンはピンクであることから，04年度の女子学生のレッド嗜好は，流行色のピンクが影響していると考えられる。しかし，04年度と同様にライトトーンを好んでいる08年度の女子学生がレッドパープルを嗜好したことは，女子学生が単純に流行色を取り入れているのではなく，本来好む傾向であるレッド系の色相が流行色の場合に色相の支持が継続することを示唆していると考えられた。このように，好みに近い色相が流行した場合には，その流行色を好む意識が継続する傾向は男子学生においても認められ，これは08年度の男子学生がレッドパープルを嗜好したことに示される。そして，レッド系の流行は男女ともに持続されやすい色相であると考えられた。本調査では，ブルーグリーンとレッドパープルのように補色に近い色相が同じような期間に示された場合の両色の用い方は不明だが，グリーンに対する学生の不支持意識が明瞭であったこと，柄による配色に補色関係を好んでいないこと（表１）から，彼らは補色配色を好まないことが推測され，これは色相差が大きい配色を好まない日本人の傾向と対応する[8)]。しかし補色に近いイエローとブルーの場合には調和意識が強いことも報告されており，着装における配色意識は今後の改題としたい。また，08年度の男子学生は女子学生と同様にレッドパープルを好んだが，レッドパープルは嫌悪色としてもトップに示されていることから，男子学生の色彩意識には流行に逆いたいという意識も推測できる。以上より，女子学生の色彩意識が男子学生より高いと思われたのは，女子学生の色彩判断が流行に近い状況であることを示したことによると考えられ，この意味において，男子学生の方が女子学生より色彩判断能力が優れていると考えられた。

4. 結論

被服行動の影響要因として報告され，影響力が大きいと考えられる色彩について，基本的意識の解析を試み，以下の結果を得た。

① 男女差は08年度生において多く認められ，両年度に共通して認められた男女差の項目および内容から，女子学生は流行を取り入れる要素を自ら設定していると推察された。また，両年度において大学生は衝動買いをあまりせず，比較的慎重に被服行動を行っていると考えられた。

② 有位な年度差は女子学生で多く認められ，そのほとんどで08年度の学生が04年度の学生より意識が高く，似合う色を意識していることから，08年度の女子学生の被服行動は高い色彩意識に基づいて行われていると考えられた。男子学生は，流行意識の低下と顔に接する状況で使用するモノに似合う色を求めていることから，流行に左右されない色彩判別意識の定着が推測された。

③ 04年度，08年度男女大学生に共通する購買意識から，大学生は潜在的に似合う色を求めていると考えられ，学生の被服行動には色彩の影響が大きいと考えられた。しかし女子学生は顔に隣接する色彩へのこだわりが低いと考えられ，色彩判断が十分とは言えない状況であることも推測された。着装色への流行色の彩用は女子学生において明瞭で，男子学生においては流行への逆行行動も感じられたが，学生の共通意識として，流行色が本来の嗜好色に近い色彩の場合は，流行色が嗜好色として継続される可能性が高いと考えられた。

引用文献

1. 柏尾眞津子，箱井英寿；大学生における被服行動と時間的嗜好性との関連性について，繊消誌，47，661-670（2006）
2. 岡村好美；生活用品の表示に対する学生の意識の検討，衣服誌，52，89-96（2009）
3. 橋本玲子，加藤雪枝，椙山藤子；色彩嗜好とファッション意識との関連性，繊消誌，26，295-301（1985）
4. 三浦久美子，齋藤美穂；＜身につける色＞と＜周辺の色＞の嗜好比較，色彩誌，28，163-174（2004）
5. 出井文太；色彩と衣服-戦後における日本の衣服の色彩嗜好の変化，衣服誌，48，92-95（2005）
6. 近江源太郎；色彩心理入門，日本色研，64-65（2003）
7. http://www.jafca.org/trendcolor/
8. 近江源太郎；色彩心理入門，日本色研，76（2003）